



Jaw Bone Scrapers in Ancient China and Japan

春成秀爾

はじめに

- ① 資料
- ② 分類
- ③ 用途
- ④ 系譜



中国で、4000～2300年前（二里头文化～戦国時代）に普及していた骨器に、豚や牛の下顎骨を利用して作った搔器（中国では「骨鏟」つまり土掘り具と考えている）がある。これまで確認したところでは、山西省・陝西省・河北省・河南省・遼寧省の諸遺跡から計約130点が見つかった。豚の下顎骨を用いた搔器は、佐賀県宇木汲田の2500年前（弥生早期）の遺跡からも出土している。この遺跡にもっとも近い出土地は、遼東半島の羊頭窪と双砬子の例である。朝鮮半島からまだ1例も見つかっていないけれども、この骨器はおそらく遼寧地方から朝鮮半島を経て九州に伝わったのであろう。

この骨器の刃部は片刃のヘラ状であって、滑らかな磨滅がのこっている。獣皮の内面の脂肪を除去してなめすと、光沢を伴う独特の磨耗痕が生じる。この骨器は脂肪を除くのに用いた搔器であると私は推定する。世界的にみると、皮なめしに古くから用いていた器具には、石製・骨製・鉄製の各種の搔器がある。日本の旧石器時代には石製のエンドスクレイパーが発達し、縄文時代には骨製のヘラがある。これらが皮なめしの道具だったのであろう。

九州で見つかった豚の下顎骨を素材にして作った大陸系の搔器は、日本の最初の農耕文化―弥生文化のなかに中国の戦国時代の文化要素が加わっていることを示唆する重要な証拠となる。中国や日本で、この搔器を作り使っている人々は、豚を飼い、その肉を食べ、その皮革を加工した衣服を着ていたのであろう。